

会議録

会議の名称	平成20年度 西東京市青少年問題協議会 第1回
開催日時	平成20年4月15日（火曜日） 午前10時00分から午前11時50分まで
開催場所	田無庁舎3階 庁議室
出席者	委員；大塚委員、大松委員、角田委員、金原委員、栗原委員、嶋田委員、住田委員、長坂委員、中野委員、細田委員、真鍋委員、森（信）委員（五十音順） 欠席；木曾委員、堀尾委員、本間委員 事務局；子育て支援課；森下課長、萩原課長補佐兼調整係長、調整係主査 倉本、主事 矢部 児童青少年課；齋藤課長、児童青少年係主査 原
議題	1 「西東京市の青少年像」の具体的な取り組みについて 2 その他
会議資料の名称	<ul style="list-style-type: none"> ・会議次第 ・「西東京市の青少年像」の4つの柱についての具体的な取り組み ・西東京市青少年育成会より提言についての意見 ・「青少年問題協議会の提言についての青少年の意見調査」（2008年3月15日実施） ・青少年の意見調査集計 ・ひばりが丘児童館、下保谷児童館建て替えについて ・「西東京市子ども家庭データブック」（平成15年3月） ・ミュージック パーティ・イン西東京市ミニライブチラシ ・平成19年度西東京市青少年問題協議会（第4回）会議録
記録方法	発言者の発言内容ごとの要点記録
会議内容	
<p>発言者名： 発言内容 森下課長 定刻となったので、協議会を始めたいと思う。まずは座長よりご挨拶をいただきたい。</p> <p>座長 会長は公務多忙のため欠席されているので、代わってご挨拶させていただく。4月になり各々で新しい出発があったようである。</p> <p>本日は目に留まった文章を皆さんにご紹介したい。人に支えられるということについてであるが、親や大人が自分に辛抱強く見守ってくれたことで、人の力を信じることができるようになり、自身も人を支えたいという思いから医師になったという内容であった。地域に住む人間にとって、この「支える」ということが大事だと考えている。みなさんのお力をぜひお借りしていきたいと思う。</p>	

それでは事務局より欠席者の報告などをお願いしたい。

事務局

欠席者報告

資料説明および報告

西東京市青少年育成会より提言についての意見を報告いただきたい。

A 委員

前回の協議会で、提言について「青少年育成会への周知がなされていない」という意見があったため、青少年育成会連絡会にて配布をし、意見をいただいたものを集約したものである。「青少年育成会の現在の活動がどういったものか」と、「青少年問題協議会へのお願い」という内容となっている。

座長

質問があれば伺いたい。

なければ議題に入る前に、前回の会議録の承認を行いたい。

委員一同

異議なし。

座長

それでは承認させていただく。

つづいて議題に移りたい。「西東京市の青少年像の具体的な取り組みについて」であるが、専門部会において協議されてきた内容をご報告いただきたい。

B 委員

専門部会を2回開催し、青少年問題協議会としてアンケートを行ってはどうか、という意見があった。報告にあったとおり、3月に「ミュージック パーティ・イン・西東京市6th」が開催されたため、そこでアンケートを行った。内容は子どもの権利についても意識したものとなっている。参加者は約600人、アンケート配布数400枚、その内回収できたものは115枚であった。このアンケートについては、専門部会としてクロス集計などをしていきたいと考えている。

また協議会には専門的な知識を持った方が大勢いるので、4つの柱の具体的な取り組みについて役割分担をし、ご意見をいただきたいという話になった。6月頃までにご意見をいただき、集約していきたい。

また、青少年育成会からも要望があったとおり、青少年からの意見聴取についても専門部会で直接出向いて行いたいと考えている。

座長

専門部会からの報告であったが、4つの柱についての意見を各委員より伺いたいということであったが、どの部分について書いても良いのか。

B 委員

専門の分野の意見を伺いたいが、ご意見があれば他の部分についても意見をいただきたい。可能であれば、委員のみなさんを4つの柱に分けて担当していただきたい。

座長

それでは4つの柱ごとに、担当する委員を決めていきたいと思う。

1 自己の可能性を信じ、自己決定に責任を持つ青少年

C 委員、D 委員、E 委員

2 人権を尊重し、人とのかかわりを大切にする青少年

F委員、G委員、H委員

3 自己の目標をもち、その達成に向けて努力する青少年

I委員

4 自然に目を向け郷土を慈しむ青少年

J委員

I委員

抽象的な意見ではなく、具体的なものがよいのか。

B委員

できるだけ具体的な方法がわかるものがよいと考えている。4つの柱ごとにその青少年を育てるための方法論を意見としていただきたい。

K委員

確認したいが、まず家庭・学校・地域が一体となって、青少年問題を考えることが基本であると思うが、どこが中心になるのかと考えると、協議会として「地域」が中心となる場合に具体的にどういったことが、どのようにして連携していくのかを書いていけばよいのか。

B委員

そのとおりである。K委員には、提言の4つの柱について考えた時に、基本的な部分を作っていたため、総体的にご意見をお書きいただきたい。

また、みなさんご担当のところだけでなく、4つの柱のそれぞれに関連した部分もあると考えているので、ご意見をいただければと思う。

座長

担当以外のところも意見を出してよいのか。

B委員

ぜひお願いしたい。また、ご意見は400字以上で書いてほしい。欠席者には、専門部会より依頼をしたいと考えている。

座長

それでは6月15日が締め切りであるので、それまでに事務局へ提出願いたい。

つづいて、専門部会として青少年から直接意見を聞きたいということである。専門部会より説明をお願いしたい。

B委員

青少年の意見聴取についてもそうであるが、通信の発行・発信や、4つの柱で「自然」について触れているが、遊びの重要性についても、協議会の中で議論をいただければと思っている。

専門部会でも話したが、例えば「自然に触れ合う大切さ」というが、なぜ大切なのかわかっていない。幼児期から視覚・聴覚・嗅覚などを磨き上げていくことによって、思いやりの心や感受性が育つことに結びついている。そういったこともご意見としていただきたい。

座長

少し整理したいと思う。専門部会において意見聴取を行ってもいいか、ということであるが、前回の協議会において承認を得ているので、再度専門部会からの要望ということである。

B委員

意見聴取は青少年とその親についても行いたいと考えている。また、アンケートについても行いたい。

座長

それではご承認いただけるか。

委員一同

異議なし。

座長

それではお願いしたい。アンケートについてもクロス集計をしたいという意見であったが、このアンケートも初めて見る方が多いので、ご意見があれば伺いたい。この回答はほとんど高校生であるのか。また、イベントの出演者だけであるのか。

B委員

回答についてはそうである。高校生と大学生がほとんどを占めている。

また、回答は観客も含まれている。

F委員

ミュージック パーティとはどういったものなのか。5月5日に開催するミニライブはロックであるようだが、音楽が好きな子どもたちが集まっているのか。

B委員

イベントの内容を説明したい。7・8年前に路上でダンスやライブをしている子どもたちが多く、話を聞くと発表する場がないということであったので、市の担当者と話をし始めたイベントである。内容はダンスとバンドが主で、実行委員会を中高生が組織し、当日の準備など全てを青少年が行っている。

また、近年は「異世代間交流」を目的として、30代から40代の年齢のプラスバンドや、平均年齢70歳を超えるコーラスグループ、また小学生のダンスチームなどもゲストとして出演している。今回の参加者は約100名、観客は小学生から青少年の親世代まで約500名程度であった。またイベントは年間7・8回開催している。

F委員

そういったイベントであると、ある程度趣向や趣味が似通った子どもたちが集まっているということか。

B委員

集まる人は多様である。音楽に興味のない子どもが実行委員になっているし、音響調整や照明などの機材を扱うことあるので、偏っているという認識はない。

K委員

4つの柱やアンケートなどに係わる部分などへの意見であるが、青少年が安心していられる居場所や、自己責任が持てることや、人のために役立つなどを考えていくと、先日、多摩六都科学館へ行き見学したのであるが、小学校高学年の子どもがお手伝いをしていた。青少年が市の中で地域の大人と協力しながら、自分が役割を持って役に立てるところがいろいろ出てくると、よいのではないかと感じた。子どもたちの力を役立てる場所や活躍する場所が、たくさんあるので、そういったことも提言の意見の中に入れていければよいと思う。

I委員

私自身が係わっている子どもは、自分が大事にされていないので、自分に対してのイメージが悪すぎる。それを取り繕うために問題を起こしてしまうのではないかと感じて

いる。自分のしたことをきちんと見て、評価をしてもらえると変わってくるのではないか。先ほどの意見で、役割を持つということと言われていたが、積極的な子どもはそういった方法がよいと思うが、消極的な子どもにどういった働きかけが必要なのかと考えたとき、ワンテンポ待って、見ているという場所があってもよいと思う。

座長

このアンケートを見たとき、「自分が好きだ」という設問に「そう思う・まあそう思う」の回答が多くて驚いた。多くのアンケートでは自分を好きでないという回答が多いが、自分の好きなことを一生懸命やっているからなのか。

I委員

今回、回答されているのは女性が多い。この年代であると、女性のほうが自分の「やりたいこと」や「やれること」がはっきりしているようである。男性は目標も見えないところがあるのではないか。男女に差があるように感じる。

B委員

今までたくさん青少年と接しているが、男性のほうが幼いと感じる。目的意識の違いなのか、女性は進路についても明確に目標を持っているが、男性は「やりたいことがない」ということが多い。

E委員

大学でも女性のほうが進路について目標を持ちやすい傾向はあるかもしれない。それは幼児教育や看護などで解るように、それらに直結するような学部や学科があるからだと思う。

学生の様子について最近感じたことは、それまでの成長過程で、大人との関わりにおいて良い関係を保ってきた学生は、教員との意思の疎通が上手であるように思う。もちろん意見の相違があったとしてもだが、一方そうでない学生は意思の疎通以前の問題として、特に精神的な部分で対立軸が感じられることがある。

アンケートの中で「自分は必要とされている」という設問に「あまりそう思わない」や「そう思わない」が多いと感じた。このことについて、親は子どもが勉強をしていれば「良い子」と感じ、家庭内の役割や地域社会での役割についての教育にはあまり重きを置いていないからではないか。それは知らず知らずの内に親たちが子どもの無限な可能性について、大人から制限を加えていることにはならないだろうか。子どもが「自分たちが自ら行動をしている。家庭や社会の中で役割を果たしている。」という気持ちが必要で、そこから充実感や満足感が生まれ「自分が必要とされている」という自身につながっていくのではないかと思う。

J委員

「自然」ということが漠然として感じている。大人が子どもに何かを残していかなければならないという中で、自然や郷土が伝えづらい社会になっていると感じている。青少年のような「血気盛ん」といわれる時期は、かっこつけてしまったり、周りの目を気にしたりしてしまうので、「自然」と触れ合うことに係わりづらくなっているのではないか。そういった雑念を取り除いて、「自然体」が必要なのかを伝えることが重要である。

アンケートについては、とてもよい内容で興味深い結果が出ていると思う。学校に依頼するか、生徒会に依頼して学園祭で行う、方法を考えて調査できるとよいと思う。

H委員

今回のアンケートは目標を持った子どもへ実施したので、こういった結果になったの

ではないか。例えばひきこもりなど消極的になっている子どもたちの意見を聞きだせれば、さらによい青少年像ができあがってくるのではないかと思う。

中学生の人権作文があるが、体験に基づいたことを書くほうが、説得力がありいい表現ができる。子どもは体験が重要であるので、そういった機会をたくさん持てるとよいと思う。

B委員

最近、問題となった子どもが普通の家庭環境であった。子どもを犯罪に走らせないために、具体的な家庭や地域での取り組みの何が欠けていたのか、容易に判断できない。

G委員

子どもが悪いことをしても反省の色もない場合は、親が「手に負えないから」ということで見放してしまっていて、親が係わっていないと感じるものがある。

座長

自身が接している子どもも、親が見放したら最後であると感じている。

G委員

万引きのケースで多いのが、10歳くらいまでの子どもは泣いたりして反省しているように見えるが、13・14歳を超えると反省していないと思われるものがある。親の反応もさまざまである。中には手を出す親もいるが、「幼い子どもにとって拠り所は父母しかないのだから、叱らず優しく受け入れてほしい」と言っている。

I委員

世の中が優しくなりすぎている。被害を受けた店などは、強く叱ったほうがいいと思う。親が子どものために頭を下げる必要があるのではないか。自分の目の前で親が頭を下げるのを見れば、子どもの気持ちも変わってくるのではないか。

C委員

親として子どもが悪いことをした時に、叱らずにいられないと思う。

G委員

してしまったことは罪であるし、よくないが、子どもには他に頼るところがない。子どもの年齢にもよると思うが、小さい子どもは受け入れてほしい。優しいばかりがよいということではないが、厳しく攻撃することも好ましくないと思う。

D委員

自身は防犯等のために、道に出て挨拶などの声掛けをしているが、ある施設にいる子どもが挨拶するのではなく、まず「優しいか」「叱らないか」と聞いてきた。そこに見守っている大人がいるだけで、安心感を与えているのかなと感じた。格差社会が実際にあり、その問題もあると思うがそういった状況も認識することが必要であると思う。

B委員

格差社会は実際あると思うが、勉強を与えられる機会が少なくなっているのは、金銭的な問題もあると思う。しかし子どもの非行を見ると、貧しいから犯罪を起こすとは思えない。逆に家族がいて裕福であるほうが、犯罪を起こしているのではないか。

D委員

八千代市の高校で入学金が払えないため、入学式に参加できなかった例があったが、親や学校がうまく対応できなかったのか。

座長

一つのことを投げかけても、人によって捉え方が違い、多様化していると思う。

昔に比べて、今の親は子どもを叱らないと思う。小さいときに「いけないことはいけ

ない」と教えなければならないし、大きくなってからでは反発が大きいのではないか。優しいのか、子どもを見放してしまっているのか。親に大きな問題があると思う。

A委員

育成会はそういった意味で小さい頃から係わっていて、それが大切であると感じている。いきなり17・18歳になるわけではないし、小さい頃から親が関わるのが大事だと思う。また、先生の影響は大きいと思う。子どもは大人の影響を大きく受けている。

E委員

親にしても教師にしても子どもたちを注意する以前に、お互いの人間関係ができていないと受け入れられないと思う。同じ言葉でもその子に通じる重みが違うのではないか。大人と子どもとの人間関係は、兄弟的な関係や友達的な関係とは一線を画するものであることも知っておかなければならない。大人と子どもとの人間関係の構築には共に仕事など汗をかくことも大事であると思う。大人の懸命に働く姿を見て、子どもは成長し、やがて自立するのであるから。

J委員

大人が理屈で子どもを教育しようとしているのではないか。優しさや厳しさについても、理屈が先に立ってしまっている。愛情が一番に出てくるべきではないか。

大人が自分の子ども時代を悲観していて「子どもに同じ思いをさせたくない」という気持ち強いのではないか。いいことがたくさんあったし、叱られた経験などがあったから、今の自分があるのに、そういったことを子どもに伝えていないのではないか。

B委員

最近子どもに、自分の親の職業を聞いても知らないことが多い。大人と子どものコミュニケーションが取れていないのではないか。問題を起こした子どもの親に「あなたがどれだけ子どもや家族のために、苦労しているか話さない」と言っている。親から子どもに近寄ったほうがいいと思う。

座長

たくさん意見をいただいたが、これを元に専門部会で再度話し合っていたきたい。委員のみなさんには4つの柱について、期日までに意見を事務局へ提出してほしい。

E委員

4つの柱についての意見であるが、自分の担当のところだけでなく、広く意見をいただけたらと思う。

座長

ご担当のところだけでなく、ぜひ他の部分についても意見をいただきたい。

C委員

平成17年度からの取り組みで、今回の提言が出されているが、実際地域でどのように具体的に取り組んでいくのか、横の連携などについて協議会で話はできても、青少年に関係した団体がどの程度理解をしているのか見えてこない。

B委員

予算や実施するための計画などがいないため、広報したいと考えても難しい。

K委員

予算のことではなく、先ほど発言したように、具体的にどういう形で連携ができるのかを提案していく必要があるのではないか。「できるできない」ではなく、連携について青少年問題協議会の提言が生きてくるための方法を提案していくことが重要ではないか。

C委員

そういった話の中で「印刷物が必要であろう」ということになっていくのではないか。

J委員

事務方としては昨年度の話し合いを踏まえて、今年度の予算を決定していくので、協議会の中で取り組みについて具体的に示すと、来年度の予算要求がしやすいのではないか。

座長

今期はまだ始まったばかりであるので、内容をしっかり議論していきたいと思う。

B委員

先ほどのアンケートや、聞き取りについての専門部会からの提案については、承認いただけるのか。

座長

専門部会の提案について、承認いただけるか。

委員一同

異議なし。

座長

それでは、専門部会にお願いしたい。協議事項は以上である。

それでは、この後は情報交換とさせていただきたい。

各委員の情報交換

以上にて終了。